

第8回 痛恨の記憶から

鹿島田浩二

1980年代後半、停滞するエリートシーンに颯爽と現れた「怪物」、それが桐朋高校の鹿島田浩二であった。

今でこそ日本を代表する選手である彼も、オリエンテーリングとの出会いは、気まぐれと球技への苦手意識からだった。

OL との出会い

僕が OL と初めて出会ったのは 1983 年の春、12 歳の時である。いわゆるお受験を終えて中高一貫教育の私立桐朋学園に入学した時は、身長 142 センチ、32 キロ。青白い華奢な新入生だった。何故、オリエンテーリングをはじめたか？理由は単純だ。運動神経もない自分には、花形スポーツの球技や格闘技の世界では到底やっていけないことは幼い心にもわかる。自然が好きで、少しばかり持久力があること、それに面白そうな先輩がいること。それと少しの気まぐれでオリエンテーリング部の門を叩いた。

きっかけはたわいもないことだ。しかしその後 OL の魅力に取り憑かれ、いつしかどっぷりつかった人生に進んでいくことになる。

桐朋 OLK での活動

当時、高校 OL 界は関東でも 10 数校の高校が OL 部をもつ、活気があって恵まれた時代であった。その中でも桐朋 OLK (現桐朋 IK) は中学生から高校生まで総勢 30 人近い部員がいる、高校 OL 界でも名門のクラブであった。

クラブ活動では普段はランニングトレーニングのほかりレーやサーキット、LSD、校内 OL の他、サッカー、バレー、ソフトボールと様々なスポーツをした。近年日本のエリートでもクロストレーニングの重要性が認知されつつあるが、ある意味理想に近い全身トレーニングをしていたのかもしれない。



▲今回からの執筆者鹿島田浩二 (ナショナルチームの合宿にて)

僕の入部当時の主将は高2の飯塚靖氏である。体は華奢で口数も少なかったが、OL の実力は高く、クラブのことをよく考える大人な先輩だった。飯塚氏は、後に慶応大学に進み、インカレでも活躍した選手であるが、同じく桐朋-慶応 OB の竹野浩樹氏とともに中学時代の僕に大きな影響を与えた先輩である。「お前な、世界の OL はこんなもんじゃないぞ、村越なんか目じゃないすごい奴らが五万というんだ」「スウェーデンの大会ではな、金髪の姉ちゃんが大会会場で平気で着替え・・・」事あるごとに世界の OL の魅力について語り、中学生の夢を膨らませてくれたものである。

一方、活気のある身近な先輩後輩にも恵まれた、一つ上に大江桜麻 (東大 OB)、法亢盛行 (NPO トータス)、国沢五月 (一ツ橋大 OB、現 NPO トータス)、志賀俊信 (慶応 OB)、また後輩には永田芳樹 (東大 OB)、南條伸穂 (学習院 OB) など個性的なメンバーに恵まれた。その中でも影響を大きく受けたのは国沢氏である。当時の国沢はその天性の才能から、中学生にして高校生を脅かす強さを誇っていた。1980 年代、エリートであってもオリエンテーリングの理論をきちんともっていた選手が少ない時代、国沢は独自にオリエンテーリング理論を持ち、理想スタイルをイメージしていた選手である。物

怖じせず平気で高校生と喧嘩する心臓の持ち主だが、大学生クラブの練習会に 1 人でも参加する行動力には随分とお世話になった。国沢氏に連れられて中学時代から早大や東大のイベントに顔を出したものである。この時の経験が貴重であったことは言うまでもない。

競技 OL の面白さに目覚めた中3の頃から国沢氏とあちこちの練習会に出稽古に行くようになった。見上げるような大学生を負かすのは純粋に面白かった。走力も飛躍に伸び、中学入学時 6 分程度だった 1500m 走も中学卒業時には 5 分、高2では4分30秒台まで成長した。そしていつしか国沢とともに「桐朋コンビ」として名を知られるようになる。ステレオタイプでいえばタフさとテクニックを併せ持つ国沢、スピードの鹿島田という好対照の2人だった。競い合う場は H15A, 17A からやがて HE に挑戦するようになった。

WOC への憧れ

初めて世界選手権の存在を強く意識したのは 85 年の冬の Jr.SQUAD である。当時既に日本チームの重鎮であった山岸氏や、初参加した斎藤宏顕氏 (現 ES 関東) が合宿でオーストラリア世界選手権の芸術的な地図を見せてくれた。

そして年明けすぐの 86 年冬の千葉国際大会、この大会には、その WOC に優勝したカリ・サリネン (FIN)、4 位のヨルゲン・モルテンソン (SWE) また女子では 3 位のクリスティーナ・ブロンクビスト (SWE) などが来日した。

彼らは日本のメディアにも大きくとり

あげられた。クリスティーナは朝日新聞の「ひと」欄に登場している。当時絶対的な存在だった村越・長田（現高野）両日本のエースでも歯の立たない世界の選手の活躍を目の当たりにして、強烈な印象を受けた。

初めての WOC への挑戦

そして現実的に世界選手権への出場を目指すのはそれからすぐのことである。87年フランス大会の予備選考会は SQUAD 主催によって86年のシーズンから始まった。指定された予備セレでポイント上位から本セレに出場できる今と同じシステムだ。当時高1だった僕は、高2の国沢と予備セレ通過を本気で目指して大学大会のエリートクラスに参加した。もちろん15、6の少年であるから JOLC（日本 OL 協会：JOA の前身）の公認大会では H21E は出られない。参加無制限の大学大会が勝負である。

秋からの大学大会を通じて国沢は高2にして4位を始め10位以内に3回入りポイントで見事予備セレ通過を果たす。ラップ30もない時代に村越さんとの差を真剣に分析し、他のライバルには勝って当然で望んでいた国沢にはある意味予定通りの通過である。

一方僕は一度も10以内に不入りポイントは0に終わった。当時短い距離では国沢と対等に競えただけにショックであった。しかしその年の全日本（埼玉）H17A で国沢に競り勝って優勝した成績を評価され、推薦で本セレ出場が許可された。高校生1人くらい参加を増やしても大勢に影響ないだろう、当時の SQUAD コーチがそう思っていたの推薦かは分からないが、この推薦がその後非常に重要なポイントになった。

本選は高2の春の静大会と東大会の HE クラス。ともに10km以上のクラシックである。1本目の静岡大会は、旧「山宮」今で言う「奇跡の森」である。まだまだナビゲーションも体力も充分でなかったが、最後まで耐えて走り、エリートでは過去最高の8位に入った。2本目の成績次第では代表も狙える位置につけた。この時初めて現実に予選通過を意識する。

2本目の東大会は「葛山城址」、急なトレインで10km以上に及ぶタフなコースである。高3に進学し、1本目は不本意だった国沢と、赤根峠の急峻な尾根道

で事前トレーニングもした。100分レースに耐えられる練習はしていたつもりだった。

レースでは事実中盤まではリズム良くこなした。実際3位にも入れるペースだった。しかし今も忘れない有人コントロールの9番の小凹地。不用意なアタックから隣接の DE のコントロールにはまり、さまようこと7～8分。WOC の夢が消えた瞬間である。

ゴールしてみるとトップの村越89'には遠く及ばないが、111'の6位であった。最後の望みの推薦枠は投票によりポイントで少し上回る吉田勉氏に決まった。「オレはカッシーの若さに一票入れたんだよ」当時走力派でライバルの1人だった山本賀彦氏（千葉大 OB 現 OLP 兵庫）が終わった後に慰めてくれた。

ミスさえなければ文句なく選手になれるはずだった。あの9番さえなければ……。生まれて初めて本当に後悔したコントロールだった。しかしこの苦い経験がその後の成長に大きく貢献してくれたこともまた事実だ。

▼鹿島田痛恨の9番コントロール



初めての遠征

フランスの世界選手権出場はかなわなかったが、その年初めての北欧遠征をする。O-Ringen では H16A に出場。そこでは同年代の世界のライバルがひしめき、想像を絶するレベルで戦っていた。トータルで200人中100位前後で終わった。自分が学ぶべきことがあまりにもあることに愕然とした。WOC 代表になろうなんて思ったのが恥ずかしいほど世界との差は大きかった。

しかし素晴らしくチャレンジングな世界が開けていること、そして OL というスポーツがこれほどまでに美しく、華麗

なスポーツであることに改めて感動した。絶対また自分は戻ってくる、そう誓ってカストロップ空港を後にした。

悔しさをバネに

「87年のフランス代表」それは理由もなく征服すべき対象であった。選考は公正に行われたが、そんなことは関係ない。とにかく自分が越えるべきハードル。

「村越・山岸・石井・吉田・藤平」全員に勝つ、それが帰国後高2のシーズンを終えるまでに設定した自分の目標である。

秋以降 HE クラスではその目標を常に意識して走った。WOC 組にとってはオフで気の抜ける秋シーズンだったかもしれない。しかしそんなことはどうでもいい。とにかく一回でも彼らに勝てばいい。

もっとも10月の千葉大会でその目標の大半は片付いてしまう。HE クラスで初の優勝。2位の稲葉氏に6分近い差。WOC 代表の多くの選手に土をつけた。

千葉大に出場してなく、唯一勝てない村越さんには88年1月の一宮砂丘の2日間大会で目標を達成する。総合で圧勝したのは村越さんだが、2日目チェイシングの競りあいからかうじてタイムで上回った。

そして休養に

その年の山梨での全日本。雪の影響を鑑みて異例の4月に開催された。この大会の時すでに高3に進学していた。学校の友人は皆受験モードに入っている。自分の将来に不安も覚え、モチベーションに迷いはあったが、この大会で勝って有終の美を飾る予定であった。

結果は H17A クラスで惨敗。3位にもなれなかった。同年代の選手と戦う公認大会の連勝は中2以来の12で止まった。

もういいや、全日本の惨敗を機に半ば投げやりに、半ばホッと安心するように受験勉強にシフトし、人生で一番長い OL 休養期間に入るようになった。